



十燕
種石
鹿乃卷筆

六輯

四

曾
679
27



679
57

燕石十種第六輯卷四

鹿の巻筆



そまきあふと大さういのはげめをむうりあつことあよき後ま
いひらふおどけそのゆきげんあをいにおつ後め創りまつ
といひよりまめを後いれことなりそれを作意の
るはらあ後福く世ふあまり月あちゆまちれ福つあをさゆ
おとだるうずのひびをいしめうあをさるゆまんああを
りのさあひおほくかつものさもきやうげんきま
まあすふ三佛生のあんをいかりの家がいんやこの
たるといひ鹿がすむとありああやをうち大和徳師京
師堂ぬらまはるあはるたがゆいそのあつあ
筆下ぎるゆ光

麻比はき第惣目録

第一目録

初 ちんどうやや介

二 三人あんぎ

三 せりぬれけいこ

四 いるものどうとすま

第二目録

一 筆をなれちのまやう

二 にせをーは

三 同二ちん目

四 羨中れろう山ん

五 火のえやぐらのえんそ

六 松中尾上程秀
七 いまやありあり

弟三目録

一 たいと屋ぐらこれらくがき
二 濱原親喜梅の程秀
三 さうい町るれう不えせ
四 二くら
五 正月のわいまい
六 吾等のげんらを性
七 むそうれよみそとあひ
八 中がのかけゆ持
九 吾原ひかあとい

十 仏事此のんあん
十一 ようらうれは終末
十二 きよつゆのうらひ

弟四目録

一 くどく乃念佛
二 きうぬあこのあど
三 くら後若七が火事
四 代官此のわ
五 ちやうやのうけお
六 初ん大さくま
七 かんざん此よみちう

弟五目録

- 一 ぬきれはしまり
- 二 ゆやのあま
- 三 らごりあどまあ
- 四 ちが寺法状
- 五 旭庵がかり亭
- 六 新比屋屋
- 七 あふさぬれまうけん
- 八 志をいたま本れ日侍
- 九 心もろりの我お

むんどうやや介

後草新寺町のまご六のむんざいと。どう。あど法くも幸めいせん
 の細工人ありに戸中よりあまねくあつらふるものもおろりをも
 さふふと聞くとゆきあともほみ人ありてふりさふらう。名をむん
 どうやや介と法さけりさそらうふやぶのあり。にけ行をきりて
 どうよ法くもあどた竹のまあどあぶんいざいぶんたいせいの
 志。りさんをも。や人の竹れ子をぬきまてきり。やせん
 おのいそかをい。あどを法けて。おき。にけのまふら
 竹の子十はみ本もぬす。とり。りや介を。のやに法後て
 中子どもをよびて。さく。か。ら。ぬすむ。あ。あ。と。こ。ど。く
 くせんぎす。ふ。さ。け。が。す。ま。ま。を。ご。ろ。の。事。ま。や。あ。い
 きり。い。そ。か。で。の。あ。い。ぬ。ら。で。の。あ。き。り。て。さ。い。ら。が



まじやこめそそのやそとけ行のみをとりはせし一六の
といふらんりし一六をよびてせんさくすきばうふ母らんま
しんりしゆいりんきよの志のこまぬよおきくあさんりしこま
さうばとさい介りんきよの志ゆきし志のこまぬよおきくあさんりしこま
きりたまふすやといふよぬんきよさちしおてまのたいせりし
せしゆしものをおまがきるおつをあのふせうわらおこし
あやうおまうりかいてりしゆしと志しゆあぢく介や三郎を
よびてきわれあの志しゆ二をわしゆしてはるる毎月であの
いふて又あ人をよびてしゆ我一は六年もわうこうをほら
まのりすすまのいぶんぬぎはらゆしぬおをちぢよけえ
あさんりしゆいぶんぬぎはらゆしぬおをちぢよけえ
すしとそしよとんませぬとりしさい介きりておのましゆが

あ〜とらさし〜の事あや一をうけてをんをあらおまがわ
めふしといまが目のあいらの志とあつたま〜そのを
いひつけてもぐし〜そりぬして志あきをく終とあ
そひてもあつそとせぬぞらけともぬくすときをそひし
ぬといふその時三郎希いふで〜介もを〜きしゆ
さけう〜しゆもあ〜ぬだん終り〜いし志あまげしふし
おまをんとさ〜ちぢいはの二さといひ終をち〜しゆを
二といふてさい介ものおまはめををりしゆがあ〜し

三人ろんま

後美俵町松崎源内と申者ありむし〜何れゆ〜ある
らんあり〜しゆいましゆいき〜あ志あ〜をいあ〜れきりふ
う〜はゆ〜しゆ〜あ人あ〜りありし〜一人を平川互市た

とそろう人ありいま一人を三河を三河を備と申けるが是ら
 三人の一人ともふりけりてあつてせられけりて五市たると
 とのりあつて志やう福のひめを法いよ志をぞをまの事
 をしつて西の方のいひのんたり源内をあけられ志やうを
 すまふあいのあつていひのんたり源内をあけられ志やうを
 三河を備のあつてをすまふあいのあつていひのんたり源内を
 のんたり源内をあけられ志やうをすまふあいのあつていひの
 敷すづろよむひのあつていひのんたり源内をあけられ志やう
 ちんくいけんやうの事ありといひの事とさればいんげんづら
 田舎のせふむまんあづきらひせの事ありたまりぬしそら
 をしつてあつていひのんたり源内をあけられ志やうをすま
 みてはこゝろの事ありといひの事とさればいんげんづら



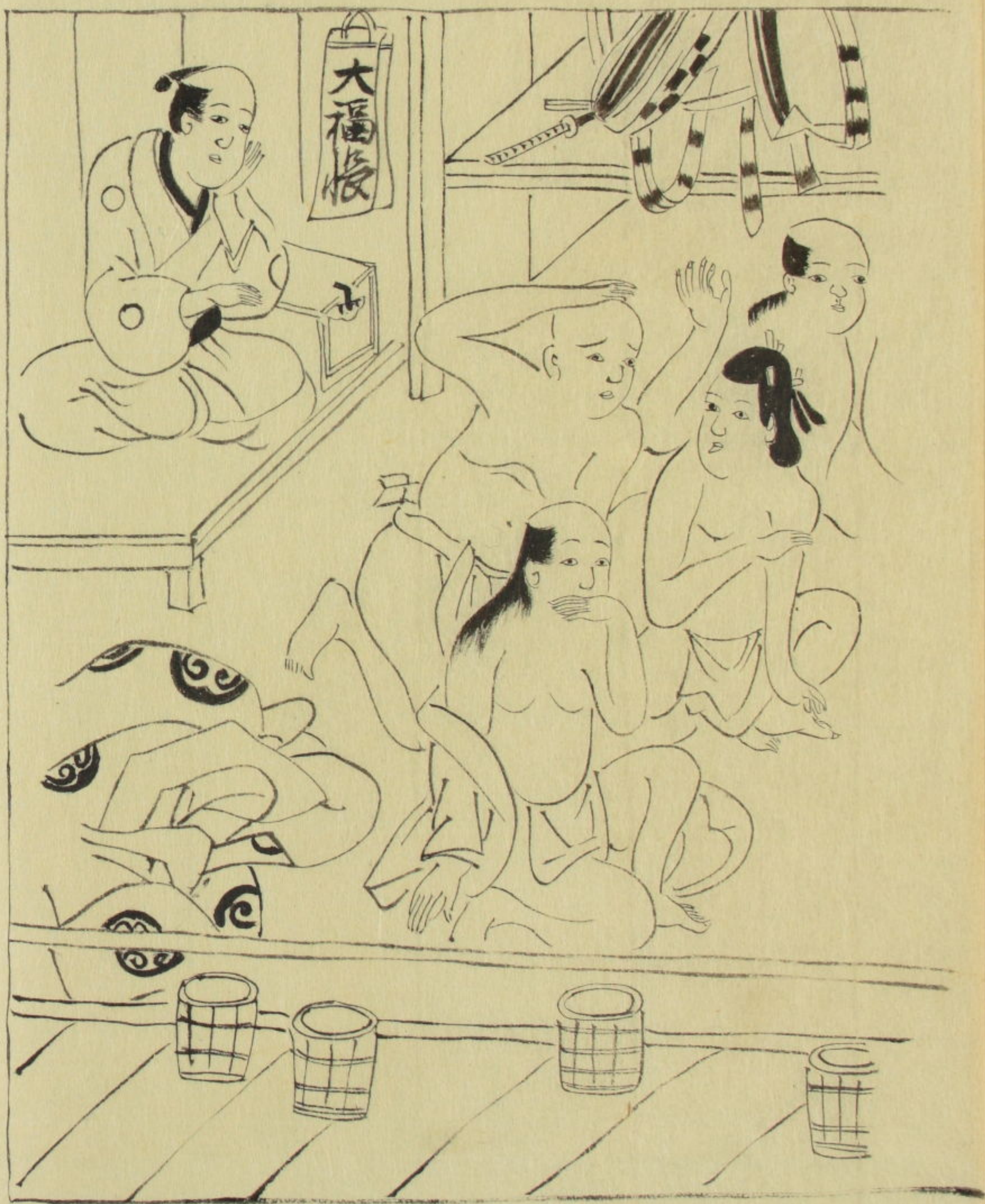
二月をいひやう〜ふりさんびきりといひては何れをもすまを
いひす。いきりの十二めんあるを〜の十二神をも
いひやう〜むろ人のあぐ〜さみり〜てよろ川のなまひを
も宗をいひす。思ありよみのか〜のき枝のりあり
もね事ハのぜんありあぐ〜まのあ〜ふひ〜むあり
九枚りの九めんあ〜とご志やうに入祓ありさまにす
か〜とあぐ〜米は是人をた〜そのい祓のあ〜をわ
との〜あ〜せ〜人のぜんあ〜をわ〜か〜その人のらんぬを
〜は〜枚ゆ〜の〜の〜はあり是もか〜ふら〜は〜い
ご志やうふあ〜すやといひ〜その時祓り中られけ〜は
い〜の志やうぎのあをい〜事あ〜をい〜は
あ〜〜を志やうぎのあ〜が〜を〜を祓〜は

釈迦 弥陀

の志やう〜王のま〜八枚のあけきやう八めん歩九枚の九めん
の志やう〜飛車角行のりん志。ふげん。らんをん。せい。
さんもあるとま〜あ〜のいかりありらん乃あ〜は八十
一の目天の三十三天地の三十二めん十二めん是八十一あり
のり〜は天主はむと〜人るのち志より志やうぎのあ
よ〜はのあひ〜らんふあ〜はあ〜は
のまけあり志やうあ〜て〜のあ〜合ふあ〜は
〜の人又いす光の師らんぬのむてきよどり〜を
事いけりの人をい〜ら〜他はさきのあ〜をい〜の
〜ふひ〜合のた大はあ〜のま〜か〜事あ〜銀の目
あ〜はす〜は〜極馬の〜は〜は〜は
う人をもの〜は〜をま〜は音車の軍使あ〜は〜

ぢんまをすぐにくける赤いあーがさるをさきにとあを
 するが^高ま^名き^名め^歌ぢんまを入防合ふあ^のた^大は
 小もおあ^の飛車^の一方の大將あまは後ふ新馬とある角を
 きまん^のいうりあまは新馬とあるむと^のて^て伝法仁義
 のお道よま^のま^の事^のあ^のま^のき^の経^とま^のき^のあり
 とう^のま^のふ^のり^のと^のば^のま^のい^のま^のれ^のま^のふ^の市^のた^の是^の
 き^のい^のけ^の源^の別^のの^の作^のま^のと^のも^のあり^のせ^の免^のて^の是^のふ^の志^の
 久^のう^のま^のが^のま^のは^のら^のり^のい^のま^のす^の家^の名^のあ^のま^のま^のま^のま^のま^のま^のま^の
 を^のす^のま^のい^のま^のの^のふ^のく^のも^のも^のま^のま^のあ^のが^のて^のあ^のま^のを^のお
 ろ^のま^のか^のま^のま^のを^のら^のり^のあ^のげ^のら^のん^のて^のせん^のま^の那^のた^の毎^のま^の
 き^のも^のり^のや^の人^のの^のあ^のん^のま^のま^のか^のま^のま^のの^のま^のま^のあ^のい^のま^の
 ま^のり^のた^のま^のと^のか^のま^のま^のれ^のあ^のん^のを^の一^のま^のま^のま^のた^のん^のい^の





一二三のきり

三希をぬ

はまのほく

みのいり

六あんけんぞく

うごまを

七ふきのき

おきあげて

八をひくくハ

いまのまぞ

九あのをき

きりねだ

十くそちの

あやまり

馬あといと

くひあど

是よりきりを

あげたま

せめてあやぎ

げいのち

たが玉くか

あくいかし

金銀さふ

はいなさび

もも植るも

あくくさ

さうたの香車を

とまをさ

あくのほきあ

おやくあり

人の角行

うくあり

どうも飛車

あくあり

何事と人るをんごさいをさか
 ことたご一幸もら替あん
 さくくそ三希をぬかろくをさくくめくれくとあり

せりぬけいこ

るふり一帯月より竹を巻きあをぬはぐりめしか見えせり
 出るか来鴻者も巻きまへりけまのこたより海の家を
 子ありあをぬへ巻きまへりいよひよるしるこふはりのゆも
 巻きあへりまきともかたたうち乃きまへりせりぬけをりよ
 やくあれはら流のちもふらへり。けりあ敷之けりまへりか
 まけりこたよ津ぞとんえりまへりの大いさをさへりまへり
 こやあひりんうれまへりのゆらうちまへりまへりまへり
 祢りふといともをりれあうちのいをさげぬいこたよを
 けりまへり今夜ふりんがまへりまへりまへりまへりまへり
 らんをまへりまへりまへりまへりまへりまへりまへりまへり
 小夜もあさたらのあさせいあががそのまへりまへりまへり
 小夜もあさたらのあさせいあががそのまへりまへりまへり
 小夜もあさたらのあさせいあががそのまへりまへりまへり





げのおや乃かたおあふをゆんありといくも地りいば屋をり
 くるぞやとてたちをさやとまよふりあげはをきや〜おどろき
 たごうみ〜だい和をさ〜ゆげゆ〜是い〜ふあや〜をさうれ
 こ〜てさ〜だきげがさり〜おぢ〜人あ〜あま〜あら〜と云
 りやきゆ〜ぐんめせりぬあ〜あけのかわ〜せふあ〜ふより復て
 み〜と〜い〜ら〜ま〜〜る〜〜あ〜ん〜ど〜

田舎者のどうじすき

とをり町三丁目と〜とある男き〜つ〜きりのおむ〜い
 ち〜た〜げ〜ゆ〜〜い〜い〜ある事〜と〜い〜ふ〜た〜い〜い
 人あ〜とい〜名〜あ〜い〜と〜い〜は〜ま〜ま〜ゆ〜〜い〜い〜名〜を〜い〜と〜い
 是も〜い〜を〜ま〜ま〜い〜と〜い〜と〜い〜も〜あ〜い〜事〜を〜い〜人〜と〜い〜と〜い
 とい〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い

としつゝのちもきかたしとていふはたふはたのいふをきか
 へあふかきあふあせはきものいふはたふはたのいふをきか
 へあふかきあふあせはきものいふはたふはたのいふをきか
 へあふかきあふあせはきものいふはたふはたのいふをきか
 へあふかきあふあせはきものいふはたふはたのいふをきか
 へあふかきあふあせはきものいふはたふはたのいふをきか

にせをいふ

きたる成のち極月廿八日火事たふふんあふとせうりてあが
 りあふかきあふあせはきものいふはたふはたのいふをきか
 へあふかきあふあせはきものいふはたふはたのいふをきか
 へあふかきあふあせはきものいふはたふはたのいふをきか
 へあふかきあふあせはきものいふはたふはたのいふをきか
 へあふかきあふあせはきものいふはたふはたのいふをきか
 へあふかきあふあせはきものいふはたふはたのいふをきか





おつりもりあつたよと云ふ事清井のふりかゝるありふ
 三人ともたふおあどしむをるもせんあーあんぢお子新帝
 随分おるをー我をあきあふをせんといふいふ事や
 と云ふ事さうをうりてんといふは神を清とけさのせがを
 がささうらふといふもものてにあさー然。むとかせさうせぎそ
 えめんととをよりあつてをーて有とをせん町うしとみかうじ
 町は若赤坂まむを本披所住さちてのあうばをかきりて
 うりてうす時もあり又有時いとをり町は戸橋小細所若湯町
 さいじん島大さうををさえてふう河ちの所が不あは橋を渡り
 後草下若かんごをんをうりりり〜福ふ毎日八百二百いといふ
 名屋といふ事あーあうたふ極月廿八日ありまを二月とあう
 とそいり〜うりもみめ^{赤明}ひよりあそが不飛戸此屋んまを田紀

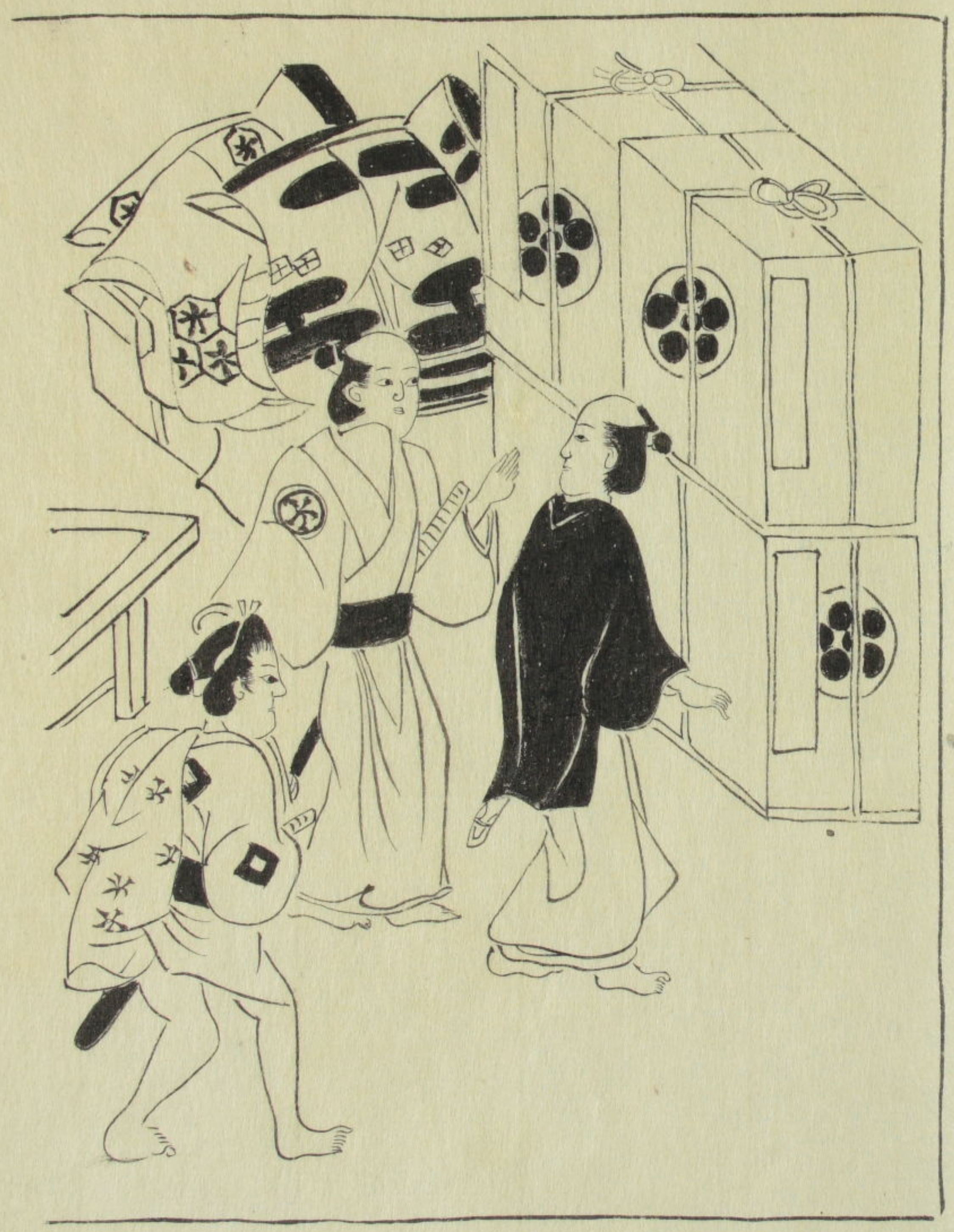
元禄十二年
 永代橋

江戸付がもろ大風ふきよつちあつりおむし〜こきんがしん
 あらや火事〜り〜天ふらあ雲まのくらあ〜きんあしあし
 このはやふいあつ人のり〜ふああ〜と〜あけけ〜
 ぶけき〜も〜あま橋あ〜り〜あふあ〜あ〜あ〜
 ときともん〜さきともぬ〜きものあ〜あ〜あ〜
 祿町と欠あふぶか〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 ぶ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 ありて。ああ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 ぶ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 ぶにげのび〜り〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 さんあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜





多ふ有付しものをかけさせしはを敷へあつりけるはきわ
 く此方極くは源をた敷を由ある人よあつりしをいかりし福ん
 ごとく作らましふあまし記しあつらんあつしをを入るし方か
 しもちとゆいしきよまふりかづりうはとむらむとゆあしあ
 十日といふあつるまきをむゆいといはををまふと作らま
 ゆりようましして。すみすしあふ二ををそふ十年ま
 んして十日をおとすとゆあきりその日げんふあまはるま
 ぶらあもぶたのうよあつるねとちのかつるあどえりん
 けぞかくまきつしあまひりまふ^者まてあつてあつ
 ぬぞぶんの事だんかやあつるゆいししてごしきふせう
 けをまきししあつてはと作あつりしはあつるゆいしはま
 ごとくごしあつるまきふそりかをまししあつるゆいし



とて終けるそしきやきつてだんかやうに休有てはありあらん
まきるまじりありあらんまきりつて終るはるよりいびきん
まじりあつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん
おのひあつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん
又うれいづつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん
いびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん
いびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん
いびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん

○火の見をくらみこ

いあつての三人づきまていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん
をえりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん
をえりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん

い一人がやうにいびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん
いびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん
あつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん

松本尾とらね

尾とらねいびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん
いびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん
あつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん

花代もさああつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん
尾のいびきんまきりつていびきんまきりつていびきんまきりつていびきん

麻の巻等中三

右鼓屋ぐらぐらぐら

と云ふ喜のらふ中村若又新若居取まぶらふか
つらふをせんと思ひ右鼓屋ぐらぐらのまをわきふ條は
なまばいふあふりのうらぐら

新若をわおりのふかきのまををま

さぞやうちのふらふこのあふらん

かくぞらりかと思はけまば若あ若あ氣のぐらふおのひてそめ
あそぐらんのはくをまらりなまば又ぐらん

うちゆりすたいあぞらのまのいぬ

そ免かぐらてもえていらん

はあふ志をわはぶまぐら



塚町馬のかみせ

佐東子云
市村志をひり
て我馬の流蘇
のありし
えの同記
載より不狂
はまの記

市村志をひりて我馬の流蘇のありしえの同記載より不狂はまの記
おことあるはかく後志ふらからざりし人ものいふまはあつたは
竹も思ふまゝに法をさたのせむりゆめをかかすせむりゆめ
米のいふまゝのものもたのせむりゆめをかかすせむりゆめ
花をむしりてさきんしと軽なる目をかけし二十人とい
合さくせいりて早まじりたのせむりゆめをかかすせむりゆめ
と人などあるはゆりゆめたのせむりゆめをかかすせむりゆめ
をしく思ふものもいふまゝに法をさたのせむりゆめをかかす
あびさるゝおとゝゝい伊友志志とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うらさんどもはゆりゆめたのせむりゆめをかかすせむりゆめ
きりきりゆりゆめの馬のありしとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ありけりゆりゆめたのせむりゆめをかかすせむりゆめをかか
志をぬいづりゆめたのせむりゆめをかかすせむりゆめをかか
ほりゆりゆめたのせむりゆめをかかすせむりゆめをかかす
かゝりゆりゆめたのせむりゆめをかかすせむりゆめをかかす

二つ折

遠かきゆりゆめの流蘇とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あひふらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆりゆめたのせむりゆめをかかすせむりゆめをかかす
あひふらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あひふらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あしひきたりしとよひしむねのよ
あつらひりしむねが他今ちうと
わめりしむねのよせはむしと
あしひきたりしとよひしむねのよ

無常のげんご

あつらひりしむねが他今ちうと
わめりしむねのよせはむしと
あしひきたりしとよひしむねのよ
あつらひりしむねが他今ちうと
わめりしむねのよせはむしと
あしひきたりしとよひしむねのよ

あしひき
どうふが
うらな

あしひきたりしとよひしむねのよ
あつらひりしむねが他今ちうと
わめりしむねのよせはむしと
あしひきたりしとよひしむねのよ
あつらひりしむねが他今ちうと
わめりしむねのよせはむしと

あしひきたりしとよひしむねのよ
あつらひりしむねが他今ちうと
わめりしむねのよせはむしと
あしひきたりしとよひしむねのよ
あつらひりしむねが他今ちうと
わめりしむねのよせはむしと



よりてつをばんむーあきくはみやきよしをま
はかやうふうち婦のうらむるれをばらあが
めあきよみやおりはするわふいと二世と
申もははーいごとかきくごくあへ回座よ
いづもわあ座のよことつめてちとあそのあす
る人足はいさくお内家太のすーをばらあ
かきよまきくーしよあひい長きあまあてい
枕をやうーあげきその方法はあなをもす
る人あきハたまはあう夕部由るの内ふ
まきくあーいーてあきよういつとあてあ
とりあ下の句をこころ年の始やうあきり

あきよらあかほゆはやくーあきよ
ばよこよこまをあてき目あはゆめひーあ
よろこびあーいさきあきあがり
とうはくろひ毎日あはいいきい
さいせんの下の句あよの句をばらあ
いざきれ

大こくあびんあうかしがたき

あきようこつとあきくあけ

あきよこれが長きあきよあきよあきよ
いざきれこればはらあきよあきよあきよ
はききけうらあきりあきよあきよ

染しぬがらすところ飲まそきゆくさくもみやう
いづくあふとも世のどくふな一ます。あてき極ら
こくハさんむそうをきうきうやうかんおあされてく
されはせいといふれ。

吾系ひるあそひ

吾系の上うああひひふあやうこのむよめの音の
あうそそあをならきけふあその内あはとの
あびくよて二日の日まてせうくせあうぬ上
序ありてきうをよびくやされんたじきあ
かふんきやう町へ行あてもああう一たん形
をとのくうちのむすめ子あうたんとあて金ま

きかあけひすすまへうさうあつぎきんきやう所
の嵐屋をあうくわてうれ金まあけ出さく何とも
け金あえ金人形をたされといふそあういそあて
けおすいそがり一たにそあう一持くけけ一ま
けるが海草すハ町までゆきそあうんあああや
中をあげてもいあんがよき人きやうらとおむひ
てこれハ中坊まかうりまて茶をひくあてあむハ
あるすしとてめちてえう茶をひくすハあが
町のまへひものあまふ^餘のそ下されといハ後ハ
あひひはけあんど茶をひくハ一あひやをそ
たいことをちてい人形をほりけりけりまうんそ



とてゆめゆめいしよちようきやく人形がわいふ
いふ

伝子ゆのいんちん

芝
あむひや二丁目お大和屋若たすてすこびる
人あり海去ま家そわいしるふお子の外後生福び
よてまし秋ころざしるが伝事をしつさき
ゆるさのい所お伝をいふお泉氏の何ごめう
福んごちありしお伝子のありる人をあくり
ゆいふおやを町おちやうまさんぢうとそ名
あまうしをほきゑのまゐおはめそうへおたん
ぶくをわかれしう

分云
芝
三日月

あぢいひいあやうおかにきでふあゆめい

あまどあぢいおのこのまんちう

又ほ一とちうはおとんぢうあり

あまうしとほやとちうとをほつて

あまうしお新編をそへてあんならん

あまうしたでかくむらういひあうしるおあや
がおいお石川氏の何ごしをすびるけ返家をうき
ておらんとしお二その家をいそそ返すけり

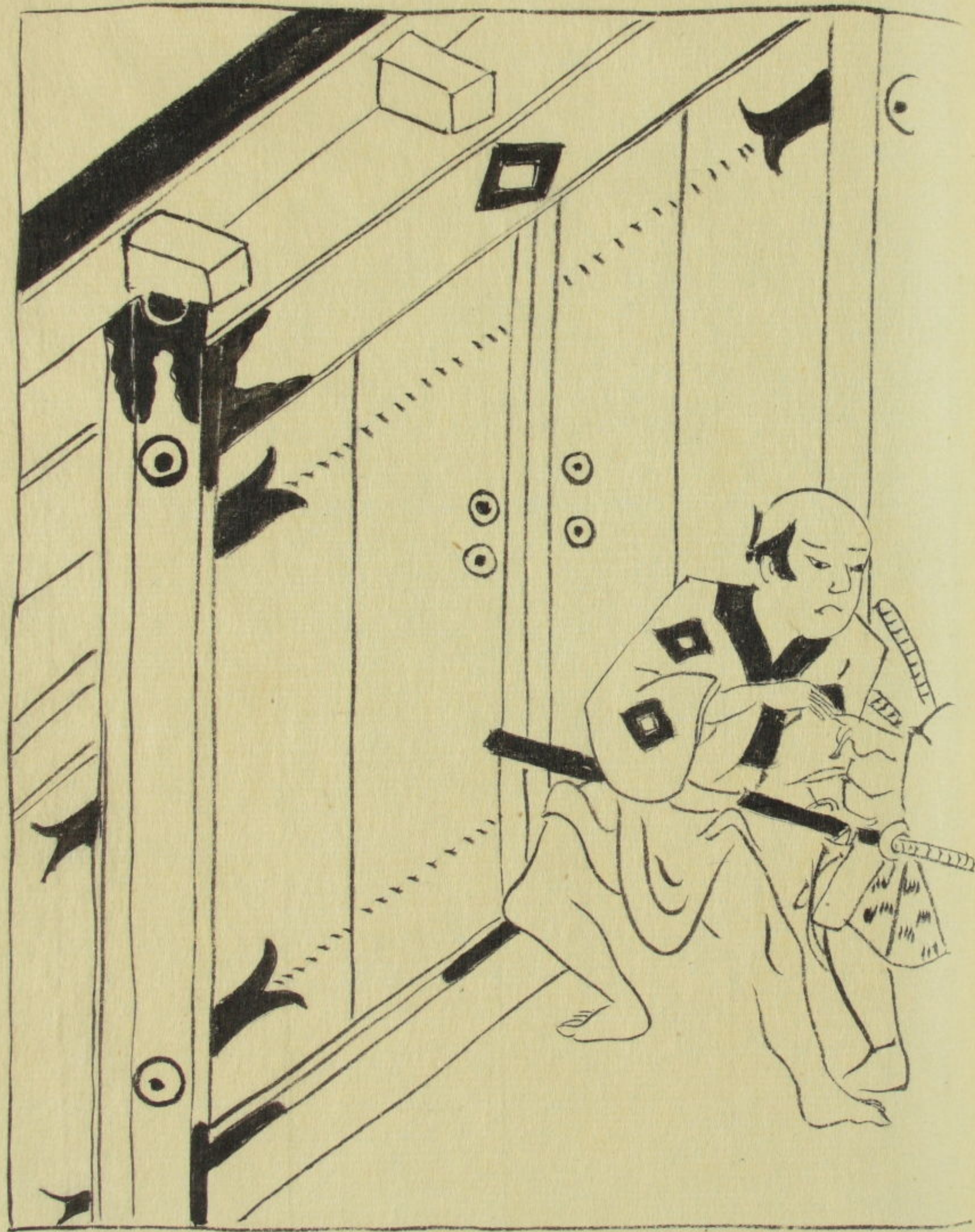
西方をちやうふたのまんぢうのち

いさよのらいがうぜんちうしきくね

伝子ゆのいんちん

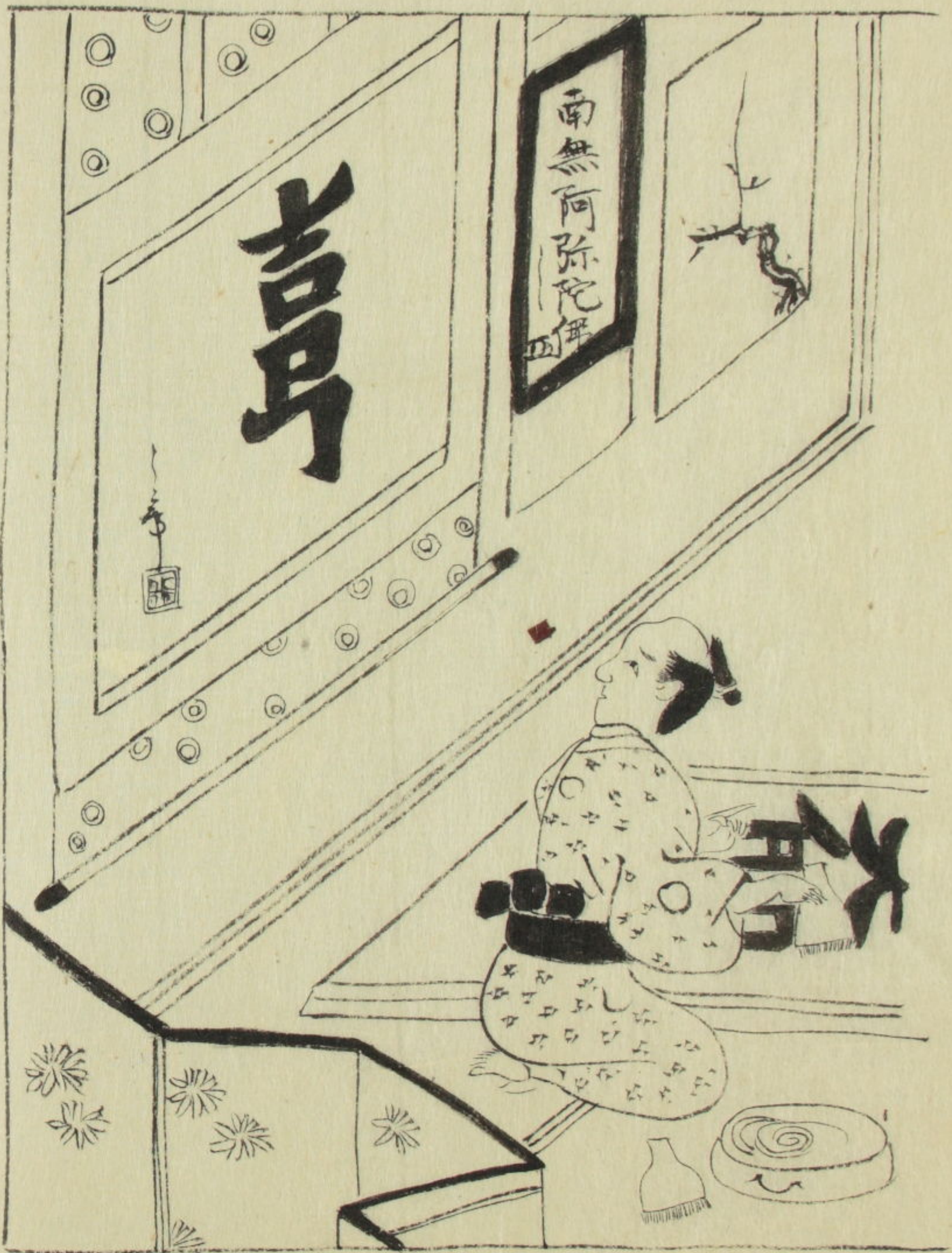




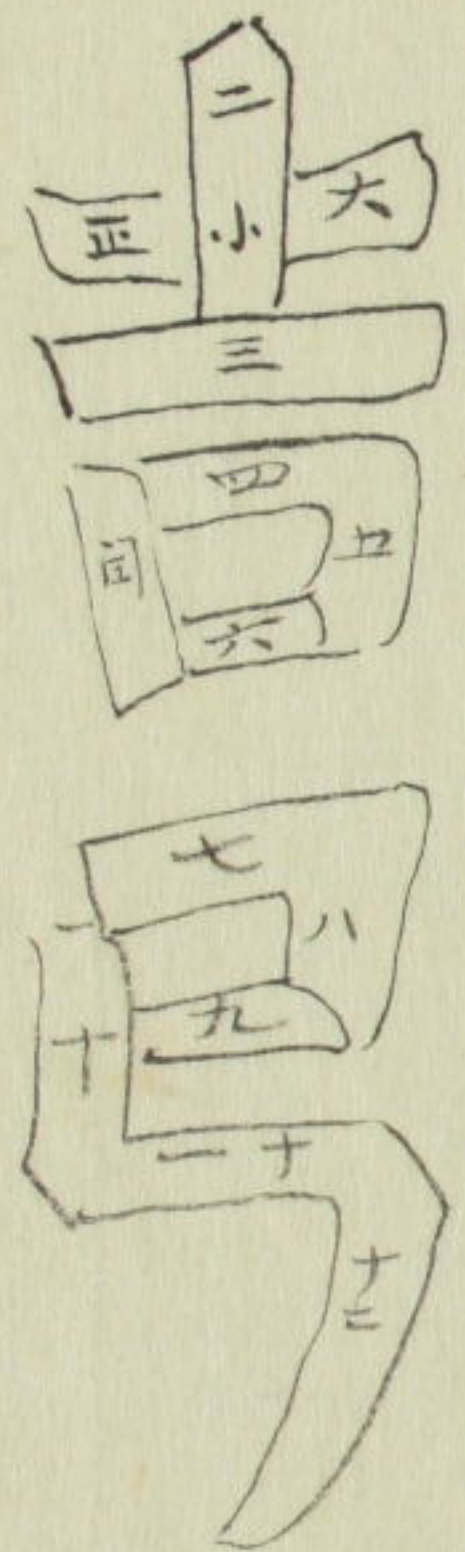


色をうつけるやうなうあまのよはにゆみあるははた
 ろあとおひますとふいぢやきいてあまの吉^{キツ}子^コかあ
 はずのハ十一のまうあまのまうあまのまうあまの
 の痛ハ十一のまうあまのあまのまうあまのあまの
 いまのまうあまのまうあまのまうあまのまうあまの
 をうてまうあまのまうあまのまうあまのまうあまの
 おまのあまのまうあまのまうあまのまうあまのまうあまの
 とまうあまのまうあまのまうあまのまうあまのまうあまの
 まんーらまのまうあまのまうあまのまうあまのまうあまの
 バ大おとまんーらまのまうあまのまうあまのまうあまのまうあまの





いりふととるバ大の字ハ先よあふ一とんとを引小の字
ハ先よそふいづを引られづよこのちういみあ大あてハ
みあ小十二月のちああるべ一ことハ岡（のり）が有さるべ
よんちうが十二ととるあてふこよみと「あて
せく」んまハちあかとからるべ



よし〜んまバ貞享三年ハちあ小のかけおこ
んこと〜の中のちうちうふあ〜ま〜



ききり志のふ浅草志んや寺としりちつけち
の何まふかの初人もきくせんよしうぢうく
とまのまのりひくあまのまのぢうあまのりあまのま
れくしりなきば目すう小僧あまのりあまのま
あかんおせ大く海はと足入あまのりあまのま
そうあまのりあまのりあまのりあまのりあまのり
ひくまのまのりあまのりあまのりあまのりあまのり
まあまのりあまのりあまのりあまのりあまのり
又あまのりあまのりあまのりあまのりあまのり
とまのまのりあまのりあまのりあまのりあまのり

かんむんのよちぢぢ

海ねあつ所ふ明石屋又助とくろまあまのりあまのりあまのり
入の庄屋きくゆくとくろまあまのりあまのりあまのり
P々あまのりあまのりあまのりあまのりあまのりあまのり
あまのりあまのりあまのりあまのりあまのりあまのり
けきばいやとうゆがつむとくろまあまのりあまのりあまのり
あまのりあまのりあまのりあまのりあまのりあまのり
おまやとくろまあまのりあまのりあまのりあまのりあまのり
あまのりあまのりあまのりあまのりあまのりあまのり







—おあまといねあふてはるのちまわら
まかの作務子とよといを中におうこれバ
のまぢぢうくみゆるたんねとこやとととさ
くさかつがさうまじや海がちのいといあ
ま、かきゆめすといあまにまのちふと
のさきく火のこもあびさ—こころのち
こゆるといあきて海祿ゆうけあま
+ぬはやくどんまされまきい
—やと—ますが海のこがぬり—
まますとくく

○ 袴の履どう
い

さ海人かけるハ世中た法及も家指門戸ソ
人の袴をひやう人の袴あまあうと
いふととと人のいふまづむあしく
あうぞととととそけこも二あ
とととととととととととととと
かまちあまをあま—ととととと
井もあるかやうのたまうあ
とととととととととととととと
中ふめいんとソふ門もあうその
とととととととととととととと

田舎る袴
をうけ



其はほむきりの志ろこそをへは是もより物こそとら
さんさんのきき物よりおけさんとのをほいらま物
さへくくらのこうあるときけいふは是もより物
ちろくくちりけりんろうきんちやくいあをより物
志ろのあびむのういあのけりやぶんぬのをより
海うみの人のあきまをそすてもうくうくうく
むろくくやがとくむきもかりあうといふ
こまのどうくくくくくくくくくくくくくくく
そのののトヤとくくくくくくくくくくくくくく
いんま

改

あしふちきる本の葉も陽丸をあらめまこの
とめうち秋をよとのでくふめくちの文がより
しろうきまの中もむもつきぬをのらん
ぬまのたも海うみのきぬふよりてあらま
とひびりのともむ古きをくくくくくくく
をあらこまさいくたさへされはかきもあま
そふてをうてきくくくくくくくくくく
ある女が原代六十てふおゆをとうあつん
と原の林ふあげきあちをあらまきれども
原氏がふふあへくたのくくくくくくく

つゆふよりそけあとりハもあしとりやと名并一冊
よせんしゆきものこは舟のかさぐハ板本すてはま
り紙あるべくハ麻氏ぎんこをとりけかき入るのこ

元禄五年己六月

作者
麻野武太郎

麻野武太郎筆巻五終

文久三年癸亥三月上瀬流覽一過陶逸氏九一

